

Gestational Surrogacy and Chinese Cross-Border Patients in Russia

ロシアの代理出産と中国人患者

Interviewee

Dr. Christina Weis

Q. ご自身の研究、これまでのフィールドワークについて教えてください。

社会人類学や文化人類学を学んでいる。2013年から英国の De Monfort University の Centre for Reproduction Research (CRR)で勤務している。ロシアの商業的代理出産についての研究で博士号を取得した。修士課程の研究テーマも、同じロシアの代理出産についてだった。

2012-3年にかけてロシアでフィールドワークを行なった。当時、ロシアでの実証研究は存在しなかった。まだ誰もロシアの代理母にインタビューしていなかった。そのためにロシア語の勉強から始めて、研究を継続し、最後には本を出版するまでになった。

当時、利用できた文献はたくさんあったが、それらは間違った理解を与えていた。言及されている研究の枠組みが、ロシアの文化的コンテキストにはあっていなかった。そして、私が発見したのは、全く異なる枠組みだった。ロシアで行われている代理出産では、代理母が長距離を移動していることにとても興味を持った。広大なロシアの隅々や CIS 諸国から、女性たちがお金を得るために大都市を目指して移動していた。しかし、彼女たちの出身地にもよるが、女性たちは差別を経験していた。そこには極めて大き

な地理的、地政学的な格差が存在していた。

現在、新しい問いが発生している。Covid-19により、ロシアの代理出産はどのような影響を受けたか? という問いだ。メディアでは、表層的なレベルでの問題が多く報道されているところだが、自分はこの問題をさらに掘り下げていきたい。医師たちに直接インタビューをするつもりだ。

ロシアでは、結婚している異性カップルが、不妊である場合にのみ代理出産を利用できるようにすべきだという保守的な声がある。その人たちの目的は、代理母のためにも、代理出産を禁止することはせず、白ロシア(White Russia)を拡大するというプロナタリスト的な計画をさらに推し進めることだ。

Q. 中国人は、海外での生殖医療の消費者として、どのような特徴が見られますか?

ロシアの代理出産が、グローバル化によってどのような変化を被るかに興味がある。(もしある国で代理出産ビジネスが禁止された場合など)。わかったのは、中国人依頼者の多くがゲイカップルだったということ。クリニックの中には、中国は膨大な市場であり潜在性があることからこの変化を歓迎したところもあるが、文化的、言語的バリアや、期待のすれ違いにより、中国人顧客の受け入れが難しかったところもあった。こうした困難にもかかわらず、中国人顧客から選ばれないことを受け入れられなかったクリニックでは、中国人顧客の取り込みに着手し始めた。

その結果、ビジネスは急速に拡大した。中国には、極めて多くの不妊の人々がいたので、競争はないに等しかった。ロシアで、中国人顧客に直接話を聞いた



かったが、Covid-19により、渡航が難しくなり、その後進捗していない。

中国人顧客は、卵子をロシアに持ち込むことができなかつた。だから彼らのオプションは次の3つだった。1)ヨーロッパの卵子バンクでアジア系の卵子を購入する。2)ロシアで中国人ドナーを探す。3)アジア人ドナーを連れてくる。彼らは、台湾やフィリピンから卵子ドナーを連れてきていた。

ドナーは母国で卵巣刺激を行なってから来る。そして、薬剤を投与された状態で、飛行機に乗ってロシアに到着後、すぐに採卵し、そして同じ日に帰国する。これは、女性の健康や安全の点から見て、非常に問題がある。特に、腫れた卵巣の状態で飛行機に乗ることは危険だ。卵子提供に同意した時点で、こうしたことがどれだけ説明されていたか、疑わしい。ロシアのクリニックの経営者は、卵子ドナーの移動について、その倫理的問題をあまり真剣に考えていないように思えた。

Q. ロシア側の医師やスタッフと、中国人依頼者の間に文化的な摩擦はありますか？

ロシア側は、中国人の家族や生殖に対する考え方についてよく理解していなかつた。それどころか、きちんとコミュニケーションをするだけでも大変だった。エージェントは、Google translateやWeChatの翻訳機能などを使って会話をしていた。卵子ドナーの場合はそれほどやるべきことはなかつたが、仲介者もいたので、間に色々な人が入ってさらに情報が不正確になった。エージェントが雇っていた中国語の通訳は、多くの場合、ロシアに住む中国人の学生だった。(だからそれほど能力が高くはなかつた。)

ロシアのクリニックでは、ロシア語や中国語の代わりに英語でコミュニケーションを取ろうとした。エージェントは、自分たちがいかにグローバルであるかを示したかった。だから、英語を使うことでそのイメージを出せると考えた。ロシア語が母語の人たちにとって、英語はしばしば誤って用いられる。だから、ロシア語が話せない人の場合、翻訳を通した後には得られる情報は、多くの部分が失われていることになる。

不妊の問題を扱うクリニックは中国にはとても少ない。アポイントの時間は非常に短く、患者はものすごく多い。だから複雑なケースを深く調べるような余地はない。中国では、患者がより望ましいサービスを受けるために、余分に支払うのは普通のことだ。だから不妊の複雑な問題を抱えた患者の場合、中国国内ではなく、ロシアに治療を受けにくることも多い。

中国人客とロシア側の医療スタッフの間には、期待にズレがある。ロシアの医師やエージェントは、中国人客が探し求めている望ましいドナーに比べて、非常に限られた選択肢しか用意できていない。中国人客の側は、欲しいものが手に入るなら、もっと支払う用意があるのに。

Q. 中国人顧客には、卵子ドナーについてどのような選好がありますか？

中国人客の中には、白人のドナーを愛好する人たちもいる。その理由は、アジア人と白人の混血の赤ちゃんは美しいし、子どもはその後の人生に成功できると思っているから。このような中国人客たちは、自分たちのこのような考えをロシア人の医師にどうやって説明するかをちゃんと考えていなかつた。医師の方



は、このような選択肢にあまり賛同していなかった。というのは、医師らは、中国人客が自分たちに似ていない混血の子をもうけて、どうやって周りの人にそれを説明するのかということを懸念していたから。

Q. 中国人の生殖観に、儒教の影響は見られるでしょうか?

今のところまだ代理出産の中国人依頼者にインタビューできていない。ロックダウンがあり、何人かのロシア人代理母たちは、中国から依頼者が渡航して赤ちゃんを連れて帰れるようになるまでの間、赤ちゃんの世話を引き受けた。依頼者の中には、一日に何度もビデオで赤ちゃんを見せて欲しいとせがむ人もいて、代理母たちはストレスを感じていた。

Q. ロシアでは、出産後、子どもの親権は、まずは代理母が持つことになっています。代理母には交渉の余地があると思えますが、代理母たちはその点についてどのくらい認識していましたか?

ロシアの代理母たちはそのことに気づいていた。契約書にサインした時に書いてあるので。

しかし、そのことが何らかの優位性を代理母たちに与えていたとは思わない。たくさんの書類があり、それらの書類を見たら自分たちに赤ちゃんへの権利がないことを代理母たちは理解するだろうから。

自分が今まで見てきたケースで、代理母が依頼者よりも優位になるような場面はなかった。収入、教育など、全ての点で依頼者の方が優位な立場にある。だから非常に大きなパワー不均衡がある。

代理母が出産を終え、子どもを依頼者に渡して初めて、彼女は仕事を完了し、支払いを受けることができる。(子供への責任は依頼親へと移行する)。しかし、例えば、もし赤ちゃんが出産後すぐに死んだなら、それは彼女がまだ仕事中的ことであり、彼女への支払いは減らされることになる。契約書にはところどころ曖昧な箇所もあり、そのことにしばしば無頓着な代理母にとっては不利に働く。

中絶の権利は、依頼者の権利にとってかわられてしまう脅威がある。過度の出血が断続的に続いた代理母が中絶をしたケースがあった。依頼者は怒り狂った。依頼者の許可が必要だったのではないかと詰め寄った。依頼者にとって、妊娠を継続することが大事で、代理母の健康は二の次だった。

Q. ロシア人代理母たちは、依頼者や子どもと会うことはできない、ということに対して、どの程度納得していましたか?

代理母は、感情的なつながりを求めているという考えは、ヨーロッパの枠組み。同じ枠組みは、イスラエルや米国にもある。この考え方は、子どもはプライスレスでギフトだという考えと結びついている。そして、このギフトを与えることで、返礼があるという期待がある。一方、ロシアでは、それはサービスや仕事と思われていた、だからそのような期待はない。それは単純な交換だ。代理出産の後に、時に付き合いが継続することはあるが、そこに何か期待があるわけではない。

依頼者と代理母は、しばしば全く異なるバックグラウンドを持ち、全く共通点がないと感じている。そのように隣人のような関係だから、関係性が終わったとしても深い悲しみはない。代理母たちは、



子どもは自分のものではないという考えに沿って自分たちの考えを調整する。

Q. ロシアで、宗教はどのように代理出産に影響していましたか？

ロシア正教会は、代理出産を毛嫌いしている。教会のトップは、代理出産を忌まわしいものだと言っている。不道德だと。St Petersburg Time には、これから代理出産契約に臨む女性に対し、祝福が行われたことが報じられていた。しかしこうした例は非常に少ない。

総じて、ロシアでは宗教は代理出産に対して主要な役割を演じていない。

Q. ロシアはとても大きな国ですが、代理出産に対する考え方や慣行にかんして、どのような地域差が見られますか？

大半の代理出産のアレンジは、モスクワか、サンクトペテルブルグで行われている。これらの都市は豊かで、数多くのクリニックが軒を並べている。優秀で高額報酬をとる医師たちがこれらのクリニックで働いている。これらの都市で働く医師たちは、出身地の田舎に何百万人の人が住んでいて、そこにも不妊の患者はたくさんいるのに、そのことには興味がない。そのような地方では、依頼者と代理母の個人的な取引が多く行われている。

Q. 今後、ロシアの法規制はどのように変わるでしょうか？

ロシアで、これまでに代理出産を禁止したり制限したりする試みがあった。もっとも新しいものは、今年の2月に動きがあったばかり。代理出産が完全に禁止されることはないと思うが、新保守主義的な規制がかけられるだろうと見てい

る。つまり、正しい資格を持った人だけがアクセスできるというもの。(白人で、結婚していて、ヘテロカップルであること etc)

Q. ロシアで行われている代理出産は“搾取的”といえますか？

“搾取(exploitation)”という言葉は、誤解しやすいので自分は使わないが、先にも述べたように、依頼者より経済的に恵まれている代理母に今まであったことがない。代理母は自分の身体をリスクにさらし、その代わりに対価を得る。少しでも良いポジションに移動できるように。

“搾取(exploitation)”という枠組みは、代理出産をよりよく理解するために有効だと思わない。

もし、代理出産を商業的取引として黒と白のレンズを使って見たなら、代理母は無情だということになる。しかし、代理出産の慣行は文化や社会に根ざしたものであり、それらが枠組みを形作っている。依然として、そこには感情や関係性が関わっている。諸規則があり、それが自分の状況を意味あるものにしており、それによってゲームをプレイできる。それは倫理的に悪なのか？ それはどのように埋め込まれているか？ そこから人はどうやって脱出するのか？ 誰がコントロールしているのか？ そうした問いの方が、代理母が搾取されているかどうか注目するよりも、はるかに興味深い。

完璧な代理出産の取引を見たことがない。代理母は、それをやるのか、やらないのか、自分で決めるパワーを持たなければならない。もし彼女の幸福(wellbeing)が確保されるなら、その取り決めは機能していると言える。ロシアでは、取り決められたルールは、エージェントや依頼



者の安全を守るためのものであって、代理母のためのものではない。

Q. 調査研究で難しかった点は？

代理母たちは、自分たちがやっていることを他の人に知られたくないので、その点にとっても気を使っていた。自分は、フィールドの状況に適應できるよう努め、代理母たちが気安くいられるように配慮した。そして、要求があった時は匿名にした。

個人的な問題を打ち明けてくれる代理母たちもいた。しかしそれらの個人的なストーリーを研究の結果に含めることはしなかった。

あるロシアのエージェントから、国際コーディネーターをやらなかと打診された。そうすれば、代理母にいくらでもインタビューをできるからと。自分は断った。それは、非倫理的だから。

Q. 今後の研究について

現在、共同研究を進めている。ガーナやカザフスタンに代理出産の小さなハブが発生している。エージェントがいかにして自分たちのビジネスの機会を求めて進出しているか、そのさまを明らかにする。それとは別に、代理出産を利用したヘテロの父親に注目した研究論文を準備している。今までストレートの男性はあまり研究されていない。研究結果はカウンセリング提供のための資料として使われる。

それから、代理出産とは違うテーマにも興味があり、研究を始めようと思っている。代理出産のテーマはもうかれこれ10年も研究してきたので。

ロシア以外にも、その周辺国のウクライナ、ジョージア、アルメニア、ベラル

ースなどは代理出産では周辺化されているので興味深いと思う。スポットライトを浴びておらず、幾分か忘れられている。代理出産研究は、白人の先進国を中心に行われていて、ロシアや旧ソ連の国々は閉鎖的で訪れる人は少なかった。

このような歴史的ギャップがあり、注目されてこなかった。だからメディアのスクandal報道も少ない。例えばウクライナではすでに卵子提供によりミトコンドリア提供技術が行われている。しかしそのことについて語る人は少ない。卵子提供についてのロシアの規制は非常に曖昧だ。だからロシアからの卵子の移動は、深く追跡されてこなかった。

注意深く見なければならぬことがたくさんある。だからこれらの地域との共同研究は不可欠だ。これらの国々を単に研究のパーспекティブ上望ましくないという理由だけで無視すべきではない。グローバルな不妊産業の連鎖をみるときに、死角になってきた要素の一つだと思う。その理由は、これらの国の言語的バリアがあり情報を得られないというだけのこと。それは、何も起こっていないということを意味しない。これらの周辺的地域にもっと注目し、どのようにしてグローバルな不妊産業が拡大しているかを明らかにする必要がある。

ウラジオストックにある興味深いクリニックが念頭にある。彼らは非常に起業家精神があり、そこにクリニックを設立した。それは、中国人訪問客がビザなしで何日か滞在できるから。北京や上海にも近い。しかし、いまのところあまり人気がない。中国人客は、大きな都市に行きたがる。彼らはウラジオストックに腕のいい医師を送り込んでいるが、まだたいした成果は出ていない。

ここからわかるのは、中国人客は、旅費を節約することにはあまり関心がない

ということ。彼らは不妊治療にこれまで大金をつぎ込んできたから。それは彼らにとって大きな違いではない。中国人客はウラジオストックのクリニックをあまり信用していない。あくまでも、都会のクリニックを選好しているようだ。

COVID が終結したら、生殖ツーリズムは再びブームになるだろうと見ている。

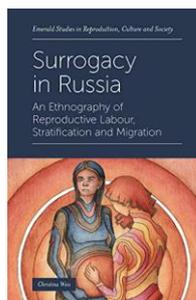
(2021年10月)

Dr. Christina Weis [Link](#)

社会文化人類学者
De Montfort University リサーチフェロー

不妊症の社会的側面、および生殖補助医療の適用と需要を専門としている。現在 the Centre for Reproduction Research のメンバーとして英国、ベルギー、スペインにおける卵子提供や、ロシアにおける代理出産市場を調査している。

書籍:



2021 Surrogacy in Russia: An Ethnography of Reproductive Labour, Stratification and Migration. Emerald Publishing Limited.

論文:

Weis, Christina and Norton, Wendy (2021) "My emotions on the backseat." Heterosexually-partnered men's experiences of becoming fathers through surrogacy. Journal of Diversity and Gender Studies, 7 (2):35-49

Weis, Christina (2021) Changing Fertility Landscapes: Exploring the Reproductive Routes and Choices of Fertility Patients from China for Assisted Reproduction in Russia. Asian Bioethics Review 13 (1): 7-22